議 事 録

会議名称	第5回小松市未来型図書館等複合施設基本計画策定アドバイザーボード
日 時	令和7年1月25日(土) 16時~18時30分
場 所	市役所4階403会議室
出席者	<p style="text-align: right;">(順不同)</p> <p>アドバイザー4名 野末 俊比古氏(青山学院大学教育人間科学部長・教授) ※オンライン参加 杓谷 茂樹氏(公立小松大学国際文化交流学部国際文化交流学科長・教授) 安岡 美佳氏(デンマークロスキレ大学准教授) ※オンライン参加 吉田 良晴氏(九九谷代表)</p> <p>事務局(市長公室未来型図書館づくり推進チーム) 横山、高橋、林、竹内、中山</p> <p>支援業務受託者(アカデミック・リソース・ガイド株式会社、株式会社日本総合研究所(以下「JV」)) 李、有尾、江頭 ※オンライン参加</p>
次 第	<ol style="list-style-type: none"> 1. 基本計画の策定について <ol style="list-style-type: none"> ①第1章~第4章更新・追記内容について ②基本計画のデザインフォーマットについて 2. 未来型図書館の概念(施設名称)について 3. リビングラボについて <ol style="list-style-type: none"> ①第4回リビングラボ開催報告 ②第5回リビングラボ企画案 ③ティーンズ版リビングラボの結果
配布資料	<p>【資料1-1】基本計画_第1章</p> <p>【資料1-2】基本計画_第2章</p> <p>【資料1-3】基本計画_第3章</p> <p>【資料1-4】基本計画_第4章</p> <p>【資料2-1】基本計画デザインフォーマット_既存ベース案</p> <p>【資料2-2】基本計画デザインフォーマット_2段組案</p> <p>【資料3】第4回リビングラボ開催報告</p> <p>【資料4】第5回リビングラボ企画案について</p> <p>【資料5】令和6年度未来型図書館に関するティーンズ版アンケート集計結果</p>

<会議内容は下記のとおり>

1. 議事

(1) 基本計画の策定について

①第1章～第4章更新・追記内容について

資料1-1に基づき、基本計画第1章についてJ Vより説明。

【主な質疑応答・意見交換】

野末氏	未来型図書館の未来の定義が記載されており非常に良い。本事業では、「未来をつくる」図書館ではなく「未来型」の図書館であると謳っているため、図書館の施設やサービス、機能などが「未来型」であるというイメージを表す必要があるのではないか。「未来をつくる」要素に加え、時代の先端を行く「未来に触れる」というニュアンスが入っていくと良いのではないかと。
杓谷氏	「未来」がキーワードになると考えている。テクノロジー分野は目まぐるしい速度で進歩しており、いま思い描く「未来の技術」が2030年の開館時には「現在の技術」となっている可能性や、いまの時点で想像ができないような技術の発展が起こっている可能性も高いと感じており、先を展望する姿勢は非常に重要である。未来型図書館は常に先を見続ける姿勢を持った施設であると良い。
安岡氏	資料5として共有いただいているティーンズ版アンケート集計結果のなかで、先端技術の活用をしたいという意見も見られた。そのような点と合わせて考えていけると良い。 また、19ページの「知ること」から「共に創る」への連関を表した図に「参加」の記載がある。「参加」という言葉は、ときに負担に感じるものとして受け取ってしまう人もいるのではないかとと思うが、ここでは「参加」には様々なかたちがあることが示されており、非常に良いと感じた。
吉田氏	未来型図書館の名前の通り、「未来型」という言葉がつくことでワクワクする部分が大いにあると思う。一方、「未来」という言葉は、漠然として見えないものという側面もあると感じる。この施設が何をもって未来というのか、みなさんと議論しながらたちづくっていくのを楽しみに思っている。 また、「知ること」から「共に創る」連鎖が生まれる相関関係について安岡氏と同じく良いと感じた。このような連鎖が体験にもつながっていくと良い。 「参加」には「遠慮がちな参加」が含まれるという記載も参加の多様さが担保されており納得感があると感じた。

資料1-2に基づき、基本計画第2章についてJVより説明。

【主な質疑応答・意見交換】

野末氏	<p>本章については4点確認したい。1点目は、文言や用語に関して、この文書を読む際、多くの読み手はキーワードやキーフレーズで受け止めていくことになるかと思う。そういう点で「コレクション」（図書館では一般的には蔵書）や、「キュレーター」（日本では一般的には学芸員と訳す）は従来使われている言葉なので、読み手にとってイメージが限定的になってしまうのではないかという印象を受けた。</p> <p>2点目の「融合」については、ただ混ぜるのではなく、それぞれの固有の機能を活かしながら「協働」していくイメージに近いのではないかと考えており、小松の特色ある言葉づくりをしていけると良いのではないかと考えている。</p> <p>3点目の人材については、司書と学芸員、両方の視点を持つスタッフを育てていくことも重要だが、司書や学芸員がチームとして一体となって取り組んでいく旨も書き込んでいくと良いのではないかと考えている。</p> <p>4点目のテクノロジーの活用について、ここではデジタルもアナログも融合させていく旨が記載されていると読み取っている。私自身は例えば「トランスメディア」という言葉をよく用いているが、わかりやすく読み手に伝わる表現になると良い。</p>
杓谷氏	<p>「コレクションハブ」は融合の拠点になってくると思うが、「コレクション」や「ハブ」という表現で良いのかが気になった。概念としては期待を感じている一方で博物館の議論はまだ足りていないようにも感じている。専門家も加わっていただき、博物館分野がもう少し厚みが出てくると良い。</p>
JV 李	<p>吉田氏がこれまでのアドバイザリーボードにおいてふれていたユースカルチャーなど現代の文化とも結び付けながら小松らしさを表現し、博物館のなかに組み込んでいけたらと考えている。</p>
杓谷氏	<p>博物館で文化を扱うのであれば、文化財であっても、それが固定してあるものではなく、文化は常に動き移りゆくものであるという見方が一般的になってきている。国立民族学博物館（大阪府）ではヒップホップ等、現在において動き続けているようなダイナミズムを表現した展示を行っている。過去の文化財のような積み重ねの上に、我々のいまの暮らしや文化があることを理解することで、未来への展望を見据えていけるのではないかと考えている。</p>
吉田氏	<p>博物館的な機能として歴史的・民俗的な資料を見るのも興味深いですが、現在のものを知るのも非常に面白い。温故知新という言葉もあるが、過去を知ることと同様に現在を知ることでも重要なのではないかと感じている。そういった部分が未来型図書館の博物館に組み込まれるとより魅力的になってくるのではないかと感じた。</p>
安岡氏	<p>この基本計画が誰のために策定するものであるのかという共通認識を持てるとう良い。ボリュームのある資料になるので、誰に宛てたものであるかによって</p>

	特に目を当てて欲しい箇所への書きぶりも変わってくるのではないか。また、図書館と博物館の「融合」というコンセプトを実現させるために、具体的にどのような実践をしていくのか（例えば市民との協働を誰が引っ張っていくのか等）についても気になっている。
J V 李	「融合」の視点は特に重要なポイントであるため、基本計画全体の構成のあり方も含めて、わかりやすいものとなるよう工夫していきたい。
事務局 横山	基本構想から段階を踏んで具体化してきたものが基本計画である。対外的に示していく際には最終的には本編とポイントを抜粋した概要版、そしてリビングラボの広報誌の3点を想定している。それらを総合的に活用しながらわかりやすい伝え方を検討していけたらと考えている。

資料1-3に基づき、基本計画第3章についてJ Vより説明。

【主な質疑応答・意見交換】

野末氏	市民の皆さんと共に検討を重ねてきていることが表れている。未来型図書館においては、すべてをテーマ配架で想定していくという方向性は問題ないが、石川県立図書館のようなすべてを更新し続けていくかたちの配架は多くの人数を要することになる。いわゆるテーマ棚と、細かく見るとNDCだがテーマ別で配架されているものが存在するということが理解できるかたちにできると良いのではないか。
J V 李	基本的には石川県立図書館はスケールの大きな企画棚であるという認識である。未来型図書館においては、野末氏が指摘された後者の考え方に近く、利用者の接点となる配架はテーマによるが、管理はNDCと併存していくことが伝わるかたちにしていければと考えている。
野末氏	諸室に名前を付けて面積を示していく必要があるとは理解しているが、中心的な機能は持ちつつも多機能性や柔軟性、可変性が担保されている旨が記載されていると良いのではないか。
吉田氏	未来型図書館の整備に伴い、既存図書館の解体等についてはどのような想定か。
事務局 高橋	未来型図書館は公会堂跡地に整備するため、施設を建設し完成してから既存図書館の機能を移転し、その後解体する予定である。ただし、引越し作業に伴い一定程度休館期間が発生する可能性はある。
吉田氏	図書館跡地には、移転・解体後にカフェが出来ることになるか。
事務局 高橋	現状、博物館と教育研究センターは先行して解体するが、既存図書館は未来型図書館の開館後に解体することになるため、図書館跡地は整備の時間軸が異なる。未来型図書館内へのカフェの導入は可能性として高いが、図書館跡地への民間機能の導入は民間事業者からの自由提案として想定している。
杓谷氏	前章で100年のタイムスパンの話が出ていた。長期間施設を継続していくためには、活動がアクティブに続いていく必要があり、このように回遊性のあ

	<p>る動線が想定されているのは良いと思う。他方、博物館においては、時間とともにものが増えていくことになるため収蔵庫の面積は開館時には十分だったとしても後々足りなくなることが懸念され、改めて検討をお願いしたい。</p>
事務局 高橋	<p>収蔵庫にどのくらいのスペースが必要であるかは検討を行っているところである。同時に自由な使い方ができることや「見える収蔵庫」等、市民から出ていたキーワードについても考慮したうえでゾーニングを検討していきたいと考えている。</p>
安岡氏	<p>コンセプトの部分に市民からの具体的な言葉が使用されていて非常に良いと感じ、ゾーニングのなかに具体的にリビングラボが想定されているのも良い。</p>

資料1-4に基づき、基本計画第4章についてJVより説明。

【主な質疑応答・意見交換】

野末氏	<p>実現するにはハードルが高い内容が書かれていると思うが、現時点では目指す方向として必要な内容だと感じる。</p> <p>1点、31ページの組織図における「一体的」とは、組織としては一つだが機能として二つあるという意味になるか。</p>
JV 李	<p>未来型図書館の組織としては一つだが、それぞれ役割として二つの部門があることを意味している。誤解がないよう表現の修正を行う。</p>
野末氏	<p>システムについてはいま考え得る機能をすべて入れておくかたちとするしかないだろう。今後新しい技術が登場した際には取り入れられるようなかたちにできるように求める記載が必要かと思う。</p>
杓谷氏	<p>同様に、31ページの「共創プラットフォーム」は施設マネジメント部門とのみ連携するよう見えるが、プロジェクト部門とも連携していくという理解で良いか。</p>
JV 李	<p>ご指摘の通りなので、図を修正する。</p>
吉田氏	<p>未来型図書館と謳う本施設において、数十年後にも未来型と言える施設であり続けるためには、常に変わっていく必要があると感じている。開館時間等、運営を行うなかで検証し、必要に応じて変化していけることも想定しておけると良いのではないか。</p>
安岡氏	<p>デジタルシステムの観点において、メタレベルで考慮すべきことも網羅的に取り入れられていると感じた。このように新しいものが生まれるタイミングは、デジタルに移行するマインドセットに良い機会なのではないかと考えている。市のDXともうまく連携していくと良いのではないか。DXはインフラの部分であるが、そのインフラをどのようにうまく活用し、つなげていくかはもう少し検討しても良いのではないかと感じた。</p> <p>その他の今後大きく変わり得る技術部分については、バックカastingで考え続ける必要があると考えている。市民が求めているものについて、いま</p>

	何が出来るのかを検討し続けていくことを記載することがポイントになるのではないか。
--	--

②基本計画のデザインフォーマットについて

資料2-1・2-2に基づき、JVより説明。

【主な質疑応答・意見交換】

JV 李	基本計画のフォーマット案については、既存ベース案を整えたものと、横書きであることは同様で、テキストを2段組にしたものの2案である。
事務局 高橋	文書のフォーマットについて特段のルールはないが、左から右まで長い文章を読むのは疲れるのではないかとという観点から、極力目の動きが少ない組み方でまとめるのが良いのではないかと考えている。 また、2段組であれば左に文章を記載し、右に資料や図版を掲載していく等の工夫も可能なのではないかと感じている。
野末氏 杓谷氏 安岡氏 吉田氏	2段組で異論はない。

(2) 未来型図書館の概念（施設名称）について

【主な質疑応答・意見交換】

JV 李	未来型図書館の概念や施設名称の方向性について議論したい。施設名称については、例として宮城県仙台市の図書館やギャラリー、スタジオ等を備えた複合施設「せんだいメディアテーク」は、設計プロポーザルの際に、審査委員長の磯崎新氏によって新しい概念として提案されたものである。名称を考えたことが、未来型図書館の概念の検討にもつながると考えている。
杓谷氏	「市民と共に創る未来」型図書館としても良いのではないか。基本計画においても「未来型図書館」と「未来型図書館等複合施設」が混在している印象があり、今後市民の皆さんとの対話のなかで、親しみやすい名称を検討してあげると良いのではないかと感じている。
野末氏	施設を表現できる名称はあった方が良いのではないかと感じる。未来を創る環境・資源がそこにあるというニュアンスが含まれると良いのではないかと感じた。
安岡氏	「未来型図書館」の言葉そのものに非常に魅力を感じているので、この言葉が変わってしまうとすると少しもったいなさを感じる。このプロジェクトとしてどのような名称が良いかももう少しよく検討していけたらと思う。
吉田氏	「未来型図書館」は非常にワクワクするものだと感じている。描いているものを実現させるためには市民の人材も必要になってくるだろう。そうした人材が活動を展開しようとした際に、施設側の制約（料金や開館時間等）などから

	活動を断念するケースもある。未来型図書館ができるだけ活動を広げられる場になって欲しいと考えている。
J V 李	いま、概念を語ることは重要であるが、固めるタイミングについては見極めながら、継続して議論を進めていきたい。

(3) リビングラボについて

①第4回リビングラボ開催報告

資料3に基づき、J Vより説明。

※特に質疑・意見なし。

②第5回リビングラボ企画案

資料4に基づき、事務局・J Vより説明。

※特に質疑・意見なし。

③ティーンズ版リビングラボの結果

資料5に基づき、事務局より説明。

【主な質疑応答・意見交換】

野末氏	自由記述がやはり重要である。これからの検討のなかで自由記述の内容を活かしていく必要があると感じた。
杓谷氏	自由記述に率直で素直な意見が出ていて良いと感じた。「名前が良い」という意見もあり、「未来型図書館」がパワーワードなのだと改めて感じた。
吉田氏	子どもたちの意見は非常に面白いと感じながら拝見していた。自由な場を求めていることや、なかなか家ではできない体験を求めているのだと感じた。これらの子どもたちの想いやアイデアが実現したらとても良い施設になるのではないかと感じている。

以上